

令和元年度 第5回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】 令和元年 11 月 28 日（木）

午後 7 時 00 分～午後 8 時 15 分

【会場】 常葉大学静岡草薙キャンパス

1 出席者

- ・ 発言者 静岡市の住民または常葉大学の在學生で
様々な分野で活躍中の方 4名（男性2名、女性2名）
- ・ 傍聴者 100人

2 発言意見

番号	分野・所属	項目	頁
発言者 1	地域防犯活動	街頭啓発活動やランニングパトロール といった地域防犯活動	3
2	観光業	音声ガイドを用いた静岡の魅力発信	5
3	校外活動 ボランティア活動	これまで行ってきた校外活動と 地域での交流の場の重要性	8
4	製造業（酒造）	創業地での酒造りの再開と酒の地産地消	11
傍聴者 1	—	教育改革と外国人受入れの拡大	16

【川勝知事】 今日はお食事の時間に集まってお話をいただきまして恐縮でございます。「平太さんと語ろう」は、もう 67 回目です。大体平日の午後にやっていたわけですが、そうすると、学生さんやお勤めの方も来られないということで、県議会で夜にもやったらどうかという御意見がございまして、夜間にするのはこれで2回目であります。そしてもちろん、大学でさせていただけるというのは初めてのことです。このキャンパス、昨年4月に開校して、中に入れていただいたのは今回初めてですけれども、外から見てもとても綺麗ですけど、中に入ると非常に大きくて、大学のキャンパスをお貸しいただきまして、誠にありがとうございます。先ほど学長先生から、若干の紹介を受けることができましたけれども、こちら側からは全部富士山が望めるということで、素晴らしいキャンパスになりまして、草薙駅が学園駅にこれから変貌するんじゃないかと、大変楽しみにしているところであります。創設者の木宮泰彦先生、もう亡くなられていますけれども、日本と中国の文化交流ですね、素晴らしい本も著されておまして、学問に対する、また地域に対する、青年に対する熱い思いがあって、「learning for life」というのが英語での言い方ですけど、高きを目指すということですよね。未来を志向する、また地域に貢献する大学になろうということで、素晴らしい大学経営をされておまして、今は木宮健二先生が理事長でいらっしゃいますけれども、心から尊敬している先生でございます。そのキャンパスに入れて、久しぶりに大学の教室に入って、嬉しい限りです。

実は今日は、私が喋るというのではなくて、この世代の代表選手、男性お二人、女性お二人の方のお話を聞くというものです。お話を聞いて、聞きっぱなしにはしないというのが、今まで 60 何回やってきて、一度も例外はありません。そして今日、私が来ておりますし、意志決定者がここにいるのです。仮に、ここでできることがあればすぐにと。そして、何か御要望があったり、すぐできないことは、必ずお答えするというふうにしておまして、しっかり拝聴して、良いお話はこちらにいらっしゃる方にも共有していただき、また我々もそれを他のところでも PR すると。そして、御要望があったり、何かお尋ねがあって、ここで決めることとかお答えできることはこの場でやってしまうという、そういう形で 60 数回やってきたものでございます。ですから、今日はこの4人の市の代表の青年、皆様方のお話を拝聴しまして、限られた時間ではございますけれども、これを県のために活かしていきたいということでございますので、時間もしあれば、またフロアの皆様からもお話を承りたいと思っておりますけれども、そういう趣旨の会でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【発言者1】　こんばんは。先ほど御紹介いただきました、常葉大学防犯サークル「JUSTICE」部長の発言者1と申します。こんなに大勢の人の前で喋るのは高校の部活動紹介以来で、そしてまたカメラも入っているということでかなり緊張していますが、よろしくお願いします。

ではさっそくですが、私たちがやっている活動についてお話をしていきたいと思えます。私たち防犯サークル「JUSTICE」は、主に静岡県警察や静岡市役所からボランティアの要望を受け、それに応えて活動し、地域に貢献していくボランティアサークルです。5年前から活動しており、現在、部員は約50名在籍しています。本日は取組として行っていることを三つお話させていただきます。

一つ目は、街頭啓発活動です。簡単に言うとビラ配りです。主に、静岡駅の改札口や青葉シンボルロード付近でこの活動を行っています。私たち防犯サークル「JUSTICE」だけで行っているのではなく、県や県警や、東海財務局、県消費者団体連盟などの職員が一緒になって、消費者トラブルに関する啓発チラシを配布します。現在、為替の投資取引や仮想通貨の儲け話で詐欺被害に遭うケースが多く、高齢者の方たちだけではなく、学生の被害も目立ってきています。他にも、警察官などを名乗り、口座番号や暗証番号を聞き出す特殊詐欺も多く発生しています。ちなみに、静岡県で発生したオレオレ詐欺や特殊詐欺だけで、年間2億円から3億円の被害が出ています。この詐欺に遭った被害者の方たちのほとんどは、詐欺の存在を知っていたのにも関わらず、詐欺に遭ってしまいました。ではなぜ、詐欺に引っかかってしまったのかというと、一番の理由としては、自分のところには来ないだろうと油断していたことです。他の理由では、犯人の人が親切で丁寧だったことや、当日中の入金や集金を求められて焦ったなどの理由が挙げられました。被害を防ぐ特効薬はありませんが、粘り強く注意を促していくことや、家庭内での会話、コミュニケーションをとることが、被害を少なくする方法だと思えます。あと、街頭啓発活動をしていて一つ思うことがあって、啓発チラシをもらってくれるのが、高齢者の方たちが多く、若い人たちはあまりもらおうとしてくれないことです。先ほども言ったように、学生の被害も大変目立ってきています。チラシを手に取り、詐欺を知ることにより、被害者にならずに済むこともあると思えます。ぜひ、他人事だと思わずに、一度目を向けてみてください。

次に、二つ目としましては、ランニングパトロールという取組を行っています。ラン

ニングパトロールはその名のとおり、ランニングをしながらパトロールを行うというもので、この活動は、静岡新聞社・静岡放送や静岡県警、活動の趣旨に賛同した民間企業団体などで作る推進委員会が中心となって展開する防犯プロジェクトです。ランニングをしながら地域を見守ることにより、大きな防犯効果が期待されています。オリジナルのTシャツを着て、地域住民の方々に挨拶や注意喚起をしながらパトロールを行っています。オリジナルのTシャツがかなり派手で、最初は恥ずかしかったんですけど、だんだん回数を重ねるごとに慣れてきて、派手なTシャツを着ていることにより、地域住民の方に声をかけてもらったりするようになってきました。また、最近では、防犯サークル「JUSTICE」は小学校と連携して、小学生の下校時間にパトロールをしています。なぜ私たちが、小学校と連携してこの活動をやろうと思ったかという、年々、小学生に対する声かけや不審者の数が増加傾向にあり、不審者が出没する時間帯が午後3時から6時に多く、小学生の下校時間と重なるためです。平成31年の1月から令和元年の10月中までで、静岡県下で発生し、通報があった不審者事案は1,315件もありました。およそ1ヶ月に100件以上、不審者情報が出ていることとなります。私たちがパトロールを行っている地域では、不審者はまだあまり出ていませんが、他の地域では頻繁に不審者情報が出ています。防犯サークルだけではすべての地域をカバーすることはできないので、不審者を減らしていくには、やはり地域の皆さんの見守る目が必要となってくると思います。ランニングをしながら、散歩をしながら、通勤通学の途中にでも、ぜひ視野を広く持ち、パトロールを意識してみてください。皆さんの意識一つで、静岡をより良い街にしていけると思います。

最後に、三つ目としましては、自転車の施錠率調査を行っています。この活動は、今年で3年目に入り、常葉大学水落キャンパス、草薙キャンパスで実施しました。啓発品と啓発チラシを自転車通学者に配布し、停めたらロック、さらにツーロックと呼びかけながら行っていました。ちなみに、啓発品、啓発チラシを配った後に施錠率調査をしたところ、まだ1割の人は鍵をかけていませんでした。僕たちが朝早く行って準備をして分けたにもかかわらず、まだ1割の人がかけてくれなかったのも、まだ、自分には関係ないことだろう、盗まれないだろうというふうには思っていると思います。もちろん、自転車の鍵をかけていても盗まれることはありますが、鍵をかけることによって、自転車盗難の数は大幅に減らすことができます。実際に、自転車盗難の年間約6割の原因は、鍵のかけ忘れです。このことから、鍵をかけることが重要だということがわかんと思

います。年々、自転車盗難の数は減ってはいるものの、まだまだその数は多いです。私たちは、これからも自転車の施錠率調査を行い、多くの学生に鍵をかける習慣をつけてもらえるように、力を入れていきたいと思えます。また、この活動は常葉大学だけでしか行われていないので、今後は他の地域の施錠率にも目を向けて、静岡全体の施錠率をだんだんと上げていけたらいいなと考えています。

以上、三つが主に私たちが行っている取組です。御清聴ありがとうございました。

【発言者2】 皆様、こんばんは。株式会社 Otono という会社を経営しております、発言者2と申します。本日は貴重な機会をいただきまして、ありがとうございます。

まず、先ほど簡単に紹介をいただいたんですが、改めて、自己紹介と事業の説明をさせていただきます。

私は実は、静岡に来て5年目になります。もともと大阪出身で、大阪生まれ大阪育ちで京都の大学を出てと、まったく静岡とは縁もゆかりもない人生を歩んでいたんですが、実は前職、新聞記者をやっており、その関係で、本当にたまたま、東京から静岡に3年間だけ転勤のチャンスをいただき、羽を伸ばしてくる、幅を広げてこいということで、静岡と縁をいただきました。私は生まれて初めてひかりに乗りまして、静岡駅に降り立ちました。その日に、本当にびっくりしたんです。地方都市って印象で来たら、ものすごく人が溢れていて、駅前の呉服町商店街が本当に綺麗で、人がみんなニコニコしながら笑っていて、まず空が青くてと。こんなすごい街があったんだということが、私のファーストインプレッションでした。その印象が、実は記者をやっているうちにどんどんどんどん強くなるばかりで、静岡の人は、たぶん晴れていて、水も美味しくて、食材もあって、全てがあるから、人がすごい優しいんですね。すごくゆとりがあって、イライラしながら歩いている人がいないと。皆さん、初めてで静岡のことを全然知らない私の話も聞いてくれたりとか、丁寧に話してくれると。こんな良いものだらけの街があったんだしたら、私はここで人生を過ごした方が絶対に幸せになれると思って、何も考えずに、2年間記者をやった後辞めました。で、その直感は当たっていたんですね。本当にここは素晴らしい街で、記者として、いろんな経営者の方、いろんな場所に行かせていただくチャンスをいただくと、世界中に自慢できるような会社、場所、食材、産業がたくさんあって、でも知られていないということがすごくもったいなくて、私は初め、静岡の人は隠しているのかなと思ったくらい、誰も知らないような素敵なものがたくさん

ありました。で、本当にもったいないなど、でもこれは間違いなく世界に誇れる場所だということを感じて、今の事業を立ち上げることになりました。

今の事業は Otono という会社で、「観光地を劇場化しよう」というコンセプトで音声を作っています。音声ガイドというものは今まで観光地、いろんな美術館とかにあったんですが、私はあまり聞いたことがなくてですね、それほど歴史文化に詳しい人間ではなかったので、それをもっと、誰でも楽しく聞けるようにしようというコンセプトで、登場人物が出てきたりとか、その場所のストーリーに紐づいた映画とか劇場の中に入れたような音声ガイドを作っています。今までと違うものとしてはもう一つ、皆さんのスマホで聞けるということです。なので、今までは美術館の中だけとかミュージアムの中だけの音声ガイドだったんですが、それが外に出て、商店街の中でも聞けると。なので、静岡駅の呉服町商店街を歩きながら、家康の声で、家康が呉服町商店街を作った思いを話してもらえたり、「この場所から見る富士山が俺が一番好きでこの街をこう名づけたんだ」というようなストーリーが聞けると。やはり観光というのは、いろんなストーリーを知ることによって、目の前の世界がもっともっと深くなるんじゃないかというようなことを、私自身、記者をしている中で、いろんな人からお話を伺って得られた経験があったということもあって、それを今の事業に活かしています。私たちは今、観光という仕事を取っ掛かりに、例えば、世界遺産三保の松原で、天女の声で松原の歴史文化、そして伝説を伝えるようなこともしているんですが、やはりもう一つ、場所には人が絶対に必要だという思いもあります。なので、静岡の場の力、そして静岡に関わる人の力を最大限に発信できるような取組をしていきたいというふうに思っています。

まとまりがなくなってしまうんですが、今取り組んでいることを少しだけ御紹介すると、今までになかった音声ガイドということで、音声に AI を搭載しています。スマートフォンで聞きながら、歩きながら、スマートフォンで話しかけると、その場所のことを天女さんが話してくれる、家康さんが話してくれるっていうような、そういうシステムを作ることで、静岡の街中どこに行っても音でおもてなしをしてくれる街というのを作っています。サイクリングをしながらだったり、タクシーに乗りながらだったり、そして、商店街を歩きながら、そんなような形で、音声をどんどん広げていくという取組をしています。

もう一つ、人のお話を先ほどさせていただいたんですが、私たちの特徴としては、全員副業でこの仕事をしているという特徴もあります。私たちは、音を作ろうと思ったも

の、声優の知り合いが一人もいなくて、音声ガイドを作ったことがある人も誰もいなかったんです。だったら、全部外から手を借りようということでスタートしています。実際に、静岡でこんなことをやっています、力を貸してくれる人いませんかと、東京の人、海外の人に発信をすると、静岡は実は自分の出身だったと、関わりたいという人だったり、一度行ってみたらあの街は本当に素晴らしいけれども、今は東京にいるという人がたくさん手を挙げてくれました。私たちはやっぱり、この場所の力ってすごくあると思っていて、100パーセントでなくてもいいから、週に1回とか、月に4回5回でもいいから静岡に来てくれる、そういう人たちをどんどん増やしていきたいなというふうに思って、副業ということ、文化を静岡に定着させていくことができればいいなというふうに思っています。日本一の富士山と、日本一の駿河湾を望みながら、月に1回、月に5回、静岡に来て、ちょっとリラックスしながら仕事をすると、そういうような人が世界中から集まればいいなということを思って、いろんな取組をしています。

最後に、こんな機会をいただいたので、先ほど県の方に要望があれば何でも言ってくれと知事が言われていたので、要望を言わせていただくと、今、Otono という会社、まだまだスタートしたばかりで、まだ静岡市内の一部にしか広がっていません。ただ、来年は五輪もあり、静岡県はサイクリングというところで、非常に魅力を発信できる可能性があると思っていて、サイクリングロードの整備だとか、東海道の整備と、東海道のストーリーを伝える中で、ぜひ Otono を一緒にやらせていただきたいなというふうに思っています。ぜひ、今日を機会によろしくお願いします。ありがとうございました。以上になります。

【川勝知事】 もう申し分のないといいますか、感想を言うだけで済むかなと思うぐらいですが、発言者1さんは法学部ということで、学生さんのお話をこういう形で聞いたのは初めてですが、誠にすごいと。常葉大学の法学部のこの方、もう警察の広報活動のレベルにすぐ通用するんじゃないでしょうかね。法律の勉強をされていますから、よく御存知ですよ。ですからオレオレ詐欺のことだとか、消費者の啓蒙とかということについて、きちっと答えられるだけの力を持っているということが、お話を聞くとよくわかります。オレオレ詐欺で2、3億円の富が失われているというか、犯罪者に盗られているということを言われましたけれども、この非常に深刻な問題について、きちっと知っていらっしやると。

それから、ランニングのパトロールというのは、あなた有名な人じゃないですか。知られているよね。Tシャツで走りながら、小学生の下校時に見守っているという、本当にありがたいです。それからまた自転車の施錠ということをまず常葉大学から始めるということで、やるべきことを全部やっているなということ、将来がとても楽しみだと。常葉大学法学部を本当に見直しました。素晴らしいと。

さて、発言者2さんですね。彼女大阪でしょ。私京都なんですよ。僕は東京の大学に勤めていたんですけども、ここはのぞみで通過するだけだったわけですね。ですから彼女も、東京に出て仕事をすると、ここを通過するだけだったんじゃないですか。ひかりかこだまに乗らないと、ここ通らないですからね。降りてびっくりするという。これはおそらく、ものすごく多くの方たちに通用する話だと思います。最初に言われたのは、空気が綺麗だということと水ですね。ここはもちろん湧水もございますけれども、本当に井戸水も、それから水道の水も美味しいというのは、毎日のことですから、本当にものすごく新鮮な、嬉しい驚きだったというふうに思いますね。

そして新聞社の記者という、非常にレベルの高い方で、徳川家康も、三保の松原ですから天女ということで、この男女の主役に静岡を語らせるということで、**Otono** でまちを劇場化するという。非常にユニークですね。これは東海道、それからサイクリング、東海道は今、五十三次が五十七次だというふうに教科書でも書き加えられています。そのうち二十二次がここに 있습니다。ですから、この東海道二十二次を、やはり、これから歩くという方もいらっしゃるから発信していく必要があるし、また、サイクリングは来年、オリンピック4種目のうち3種目が静岡県で行われます。そしてそれに引っ掛けて国交省の方でも、千葉から太平洋岸自転車道というのを和歌山まで整備している。他のところと比べますと、ほとんど静岡県下では整備できています。その時に、**Otono** の、劇場と化した話を家康さんの声あるいは天女の声で聞くことができると。今日はそれを宣伝してくれと言われましたので、**Otono** をどうぞ、よろしく願い申し上げます。また我々の方でできることがありましたら、家康さんの生の声、また天女声を自分で聞いて、どうしたら役に立つか、ここにいる方たちと一緒に考えたいと思います。

大変素晴らしいお話、お二人からお聞きしまして、気分が明るくなりました。ありがとうございました。

【発言者3】 常葉大学教育学部生涯学習学科の発言者3です。よろしくお願いします。

今回、大学からの推薦のもと、この場に登壇し、発言することができることをとても光栄に思います。今日は、私の今までの活動の様子と地域の課題についてお話していこうと思います。

まず、私の今までの活動の様子から話していきたいと思います。私自身、外に出かけたり人前に立ったりすることがとても好きな性格です。小さい頃から多くの場所で活動してきたため、私が携わってきた活動には必ず年上の人がありました。私にとって、こんな人になりたいなというふうに思える存在が近くにいたことによって、もっと何かをしたらいいんじゃないかなというふうに思えるようになりました。この常葉大学生涯学習学科というところを選んだ理由は、まず私は、たくさんの人との交流を通じて、静岡県で活動できる存在になりたいなということを、早いうちから決めていたためです。早い段階で、自分の向き不向き、そしてやりたいことというものがわかっていたため、自信を持って積極的に活動に取り組めたと思っています。

私は、実は芸能界への憧れがすごく強くて、都会に住みたいなと思っていたことが過去に何度もありました。しかし、まだ私は小さかったということもあって、都会に行くことも、都会に行きたいなと思う気持ちもあったんですけども、家族の同意が下りませんでした。それでも、私は何かできることはないかなというのをいろいろ探していたら、偶然、静岡県内で SPAC、静岡県舞台芸術センターというところを見つけて、私は当時中学1年生だったんですけども、そこで応募をして、無事に舞台でお芝居をさせていただける機会が多くあったので、まずそれが一番のきっかけになったのではないかなと思っています。こうして私が静岡で輝ける場所を探し出し、そこで SPAC という舞台に携わったり、そういう場所を見つけることができたことで、すごく自分自身に成長を感じたのかなと思っています。自分から動かなくては、新しいところに踏み出すということはとても難しいことだと思っています。与えられたことに沿っていくことももちろん大事だとは思いますが、自分の意志を持たずに実行するということは、今後とても苦痛になってくるのではないかなと思っています。

これらの私の今までの活動は、両親も賛成してくれた上で行ってきました。自分のことを理解して、挑戦の場を提供してくれる人が周りにいるということは、私にとって大きな強みとなっています。今回の配布物に入れさせてもらった、「静岡市こどもクリエイティブタウンま・あ・る」というチラシがあるんですけど、こちらの方は、私が高校2年生の時からボランティアで続けている施設となっています。今はアルバイトという

立場で、子どもたちのサポートを行っています。こちらの施設では、子どもたちが、このような空間で、小さい頃から自分の居場所を見つけることができたり、学校外での活動の場として、学校では普段は身につけられないことができるということで、今までになかった新たな自分の考え方だったり、人との関わり、人とたくさん関わること、コミュニケーションを通じて、また新たな価値観とか考え方ができる場になるんだらうなど思っております。

地域の課題についてなんですけれども、今の静岡県では多くの課題が取り上げられていると思うんですけれども、その中で私が特に重視していきたいなということが、若者たちの静岡離れです。静岡での特別な思い出や、静岡にいて良かったなというふうに思うことがあまりないことで、都市への興味、関心の方が勝ってしまい、静岡を離れてしまうのではないかなと思っています。一例としては、清水にある、お水神さんというお祭りが、私が子どもの頃からずっとあるんですけれども、このお祭りは、小中学生にとって、特に楽しんでもらえる地域の催し物の一つです。しかし、これがこの数年間、極端な小規模となってしまいました。こういったことも、子どもの頃の楽しい記憶が減ってしまう要因の一つになってしまおうと考えています。お祭りは、多くの人とコミュニケーションが取れる場になっています。地域のお祭りならなおさら、友達と会ったり、久しぶりに見かける友達と「久しぶりだね」というように声をかけたりとか、あと、いろんな人との交流の場ができたり、とにかく、人の輪が広がるものだと思います。地域をより好きになり、そこに住み続けることの居心地の良さというものを感じ取ってもらうためにも、このような思い出深い催し物を削減するべきではないと思います。逆に、もっといろんなイベント、地域の人とコミュニケーションを取ったり、人との交流の場を広げることができるような催し物とか交流の機会というものを、もっともっと増やしていくべきだなと思います。静岡の良いところもたくさんあると思うので、小さいうちから体験して、静岡から離れたくないなというふうな気持ちを持ってもらうことが大切だと思います。

私の所属する生涯学習専攻では、よく、地域の課題を見つけ、発表し、意見を交換するという授業を行っています。他の授業でも討論なども行ったりするんですけれども、多くが、今の日本の課題についてだったり、静岡の課題、または自分の住んでいる地域などの課題を取り上げるというものがほとんどです。そこで、私からの提案なのですが、将来私たちが、日本や地域、静岡市などを担っていくことになるので、討論で出た内容

だったり、自分たちが調べてきた内容、発表する内容、研究内容など、今私たちが思うことを、授業内のその場限りではなく、地域などに反映して欲しいと思っています。私たちの意見で、県や市、街などをより良くしていくことができると信じております。以上です。

【発言者4】　こんばんは。静岡平喜酒造株式会社の取締役で杜氏をしております、発言者4と申します。今日はこんな貴重なお時間をいただき、誠に感謝を申し上げます。

私の事業を紹介させていただく前に、私たちの会社の変遷から説明させていただきたいと思っております。

私の家系は、静岡に代々伝わる米問屋から始まりまして、酒造事業などをしながら、静岡で酒問屋を経営してまいりました。かつては酒造事業自体を静岡で行っていたんですけれども、経営の問題で、途中で岡山県にも酒造場を設ける機会がありまして、最終的には集約させて、製造所を一箇所にまとめてしまおうという流れになりまして、一時は岡山県に酒造場を集約させるという決断を取ってしまいました。それで、私たちは酒問屋として、その後も静岡を中心に事業を運営していったんですけれども、その流通網を駆使して、岡山で造ったお酒を販売するというようなことを長く続けておりました。そうした中で、私の祖父の代ぐらいから、やっぱり静岡県でお酒を造り、届けていくという事業にずっと想いを馳せておりまして、その事業が、やっと2012年に再開という形で、新たな会社を作って、今、その事業を継続しているというような状態です。

それで、静岡平喜酒蔵というふうに新たに創設している事業なんですけど、2012年からお酒を造っているんですけれども、当時、お酒を造る責任者に、岡山の蔵から人を呼びまして、杜氏、製造責任者として造ってもらってました。個人的にすごく関心が高かった話なんですけれども、やっぱり岡山の食文化と静岡の食文化って全然違って、味覚に対する判定だったり全然違うんですね。そういった中で、静岡の水を使って、静岡の人に似たようなタイプのお酒の酒質を設計して頑張ってもらったんですけれども、やっぱり初年度のお酒の出来っていうのは、いろんな地酒ファンに飲んでもらったんですけれども、これ静岡のお酒とはちょっと違うよねって言われたんです。そういったことから、品質の改善から始まった事業でした。そこからは、もう飲食店だったり、酒販店、さらには通常の地酒のファンの方々、ないしは同業者にアドバイスをいただきながら、毎年毎年造るお酒に改良を加えて繰り返しやっております、3年目ぐらいから、静岡

県でやっている新酒鑑評会でも合格点をいただけるような品質で、物をお届けするようになってきました。

それで、ここから私の個人の取組について説明させていただきます。私がこの家業に戻ってきたのは創立2年目ぐらいのお酒造りからで、その時から私は蔵人として手伝いをするようになったんですけれども、一つの良いものを造っていくということについて、嗜好品ですのでそもそも答えはないというような世界で、去年よりは良いものを造るとは言っても、なかなか目標が定めづらいということです。そういった中で、全国新酒鑑評会というものがありまして、そういった鑑評会に、全国各地の800以上の酒蔵さんが、そのコンテストのようなものにお酒を出すんですけれども、これは、入賞したらその商品が美味しい美味しくないっていう意義以前に、そもそも新酒鑑評会というものに定められた酒質に、あなたの酒蔵はこの技術をもってして納められますかというのが本当の意義なんですね。その意義をもってしてお酒造りを続けていかないと、我々は良いものを静岡に出していくっていうことの意義が見出せないというふうに考えていたので、毎年の全国新酒鑑評会には挑戦するようにはしていました。なかなか時間がかかりまして、5年ぐらいは入賞せずという年が続いたので、事業を続けて間もないといっても、飲んでいただいているお客様がいるということについて私は重く捉えました。岡山の杜氏を呼んでやっていたんですけれども、静岡で生まれ育った私が、この食文化に合ったお酒を造りつつ、品質改善していきたいというふうに思うようになりまして、自ら製造責任者の立場をかってでて、杜氏としてお酒の改善をしたいと取り組んだのが、去年のお酒造りからです。で、その新酒鑑評会に関しましては、先ほど紹介していただいた通り、一応金賞を取ることができたんですけれども、これからお客様に提供し続けるのは、今後事業が続く限りやっていかなければいけないことなので、品質については今後未来永劫、私たちの酒蔵では品質改善を目指しながら、常に来年の新酒鑑評会でも好成绩を修められるように努めたいなとやっております。

お酒造りについては、今私が杜氏として、いろいろ研究をしながらやっているんですけれども、一つですね、これは地域の課題というよりも業界の課題になりつつあるのかなと思っている点があります。地酒というコンテンツは、皆さんいろんな地酒を飲まれるかと思うんですけれども、皆さんの頭に浮かんでくるような銘柄だったりとか、それはもちろん静岡県のお酒だったりとか、はたまた東北の方のお酒だったり、いろいろなスターのような酒蔵さんがある一方、地元のもので地元で消費されるっていうのが、私

の考える地酒のあり方と思っているんですけれども、今情報がかなり行きかうようになりまして、全国各地の銘酒が、静岡県でも他の県でも飲まれるようになっております。そういった中で、地元で造られたものが地元で消費される地産地消の流れというものを、人々の生活に携わりながら成長していく企業としては、地酒のそういう形を目指したいなというふうに思っております。なので、私たちは酒問屋をやっているというのがバックグラウンドとしてあるので、この流通を駆使して、静岡でこれから造っていくお酒は静岡で消費して欲しいというふうに考えております。今後、静岡のお酒を、静岡の飲食店、そして酒販店、お酒の免許を持った小売店で、静岡の地元流していただけるように事業をやっていききたいというふうに考えております。

その中で、静岡のお酒ってというのは、全国に比べて製造数量が少ないんですけれども、我々が参入する前から、静岡の地酒はかなり全国的にも人気が高く、いろんな県に出荷されています。そういった意味で、静岡の地酒はかなり認知度が高いものもあります。やっぱり地産地消の流れを応援したいということで、今、静岡県も応援してくださっている誉富士という米があります。その米で造られたお酒を、県内外両方でPRして行って、県内外問わず、静岡県のお酒が良いお酒であるというような、PR告示のような形でいろいろ御援助いただくと、私たちは地域の飲食店を中心に、そして観光業と連動することによって、静岡県に来ていただいた方に、静岡県のお酒を消費していただくというような一連の流れをもって、地域を盛り上げることができるんじゃないのかなというふうに、浅はかながら考えている次第でございます。

今後の蔵元としての責務というものは、お勘定いただいている以上の品質として返していきたいなというふうに思っているんですけれども、一事業でできることには限界がありますので、今後、いろんな企業と連動しながら、地域の産業を盛り上げていきたいなと考えている次第でございます。本日は御清聴ありがとうございました。

【川勝知事】 皆さんどうも。発言者3さんはSPACで鍛えられたということで、中学生とおっしゃった。そうすると中学3年、高校3年ありますから、6年以上前ですよ。その頃のSPACは知る人ぞ知る存在だったわけです。そして、県のわずかな援助の中で、演劇そのものを追求するという、そういう宮城聰監督のもとで、本当に演劇好きの人がやって来て、そして中学生などに見ていただくために、ほとんどボランティアみたいな形でやってこられて、そして発言者3さんの目にも留まって、そしてやりたい

ということでやって、そしてそういう本物のプロに鍛えられたということですね。しかも気が付いたら、発言者3さんも御存知のことだと存じますけれども、その演劇の都静岡岡から来たということで、SPACがアヴィニヨンの演劇祭、世界でトップクラスの演劇祭でスタンディングオベーションをとったり、また、そのオープニングの演目にアジアで初めてSPACが選ばれる。そしてこの東京オリンピックの文化プログラム、日本の政府の文化プログラムにSPACが選ばれたり、文字通り日本一なんですよ。だからあなた、本当に良かったと思いますよ。

そしてこの教育学部ってこのキャンパスですよ。そして生涯学習学科ですか。生涯学習というのはそもそも静岡県の掛川から始まったコンセプトで、世界中というか日本中で知られている、これを学科にしているのはもしかしたらここだけかもしれませんね。そして、今お聞きしたところによると、この地域をテキストにして、この地域を良くしながら、議論をし、またレポートをまとめたり、発信をしているということで、この地域がテキストになっているということは最高です。外国語の翻訳をする先生のテキストを学んで頭でっかちになるんでなくて、地についての知識が身に付くということがとても大事で、同時にその中で、お水神さんとおっしゃっていたっけ。そういうお祭りの重要性、確かにそうなんです。東北の地震で被害に遭われた時に、そのコミュニティの一体感を醸成するのにいかにお祭りが大事かと。お祭りの道具が全部津波で流されて今年お祭りができないという嘆きを聞いてですね、私どもは静岡の祭りを向こうに持って行ったことがある。もう涙流して喜んでおられていました。いずれ、自分のところが復興したらお返しをしたいと思われていたわけですね。そういうお祭りが衰退していくのは良くないというふうに気遣われているということですね。そしてまたこの「ま・あ・る」という静岡市こどもクリエイティブタウン、こういうお母さんやお父さんと御一緒に子どもが楽しめるようなことまでしておられるということで、これは実践的地域学ということで、もっと生涯学習学科はPRをしなくちゃいかなんということ、これ今PRをしている次第でございます。

本当にここにとどまって、お父さんお母さんも喜ばれて、そしてこの地域を愛して、これからここで自己実現をしていくという明確な目標も持ってらっしゃることを知って、常葉大学は法学部だけではないんだということもよくわかりました。ありがとうございます。

それから、もう発言者4さんはすごいですね。地産地消ということでございますが、

自ら、岡山に長い歴史があるそこでの味とこちらでの味が違うと。まあ要するに舌が肥えているんですね、この人は。こちらの食文化と岡山の食文化が違うというのを、いわゆるファーストフードだけ食べている人はわからないんですね。舌が肥えている人がわかるということですね。ですから、この静岡の食文化に合った地酒を造らねばならない、どうするかと。自ら杜氏になったと言うんですよ。32歳で杜氏です。そして、品質をさらに上げていくという中で、金賞もお取りになったということです。皆さんよろしく。

それで、誉富士という、これは酒米です。酒米として有名なのは山田錦。これは兵庫県に加古川というところの中上流域で作られているお酒専用のお米でございますけれども、丈が高いんですよ。瀬戸内海ですから、あまり台風にやられないんですね。ところが、静岡県は太平洋から台風が来ますから、丈が高いお米ですとなぎ倒されるわけですね。それで品種改良に改良を重ねて、丈を低くして山田錦よりも美味しい酒米を作ったのが誉富士で、その誉富士を使っているマークがありますけれども、それは静岡文化芸術大学の学生が作ったものですね。ラベルのデザイン代はゼロなんですよ。普通ですと、東京の偉い人に頼むとうん百万円とか取られるわけですが、そういうことはしてないわけですね。それを使ってくださっていると。それはこちらで育ったお米ですから。ただですね、もっともっと作ってそれを宣伝しなくちゃとおっしゃったんですが、まだその酒米の生産量がそんなにどんどん増産できるような状態になってないのが現状です。しかし、こういう舌が肥えている方が、こちらの酒米は使えと。もちろん水も良いですね。それから河村伝兵衛さんがお作りになられた静岡酵母がありますから。水が良い、米が良い、そして酵母が良い。そして舌が肥えている。岡山との比較で、こちらでの地産地消の地酒をいただくのが一番良いということですね。ですから、来年のお屠蘇ですか。これは、この32歳の青年の、他の銘柄もあるかもしれませんが合わせて、こちらのお酒をよろしくお願ひしたいと思います。

ところで、「30歳になったら静岡県！」というのをやっているのは御存知ですか。発言者2さんも、大学出られて新聞社に入って数年してこっちに来られたと言うから、そうかもしれませんが、30歳前後の時に、よし私これでいこうって決めたわけですよ。だからその頃にですね、自分の本当にやりたいことがわかるんじゃないでしょうか。そして、発言者4さんとさっき御飯を一緒に食べたんですよ。その時に醸造学科を出られたと言うので、初めから家を継ぐつもりでいたんですね。親孝行です。お父様は素晴らしい息子さんを持ったと。父を安心させるというお気持ちもあって、醸造学科に

進まれている。そして、東京農大ですよ。で、聞いたら、あの小泉武夫先生、その研究室に入って修行されてきたもんですから、もう技術もしっかりしている。ですから、実際はもう二十歳前後の時には、この道に自分は進まざるを得ない、いや進もうと。そして、家業のこともある。やがてこちらに戻ってくる。そしてこちらの水、こちらの文化に合ったお酒を造るということですね。

ちなみに私も相当、酒についてはうるさい。日本酒だけですけれども。それでこちらで、発言者4さんの先輩がいらっしゃる静岡県内の酒蔵の酒を最初に飲んだ時に、これは美味しいと思ったんですよ。それからもう静岡のお酒にはまりまして、それから店に行くと、静岡の酒が美味しいにも関わらず、広島のお酒だとか京都のお酒だとか奈良のお酒が入っていて、何たることだと思っていたんですけれども、やっぱりですね、酒通にはわかるんです、美味さが。そして、料理に合うんですよ。ですからこの地産地消というのは、決してこの平喜酒造のために言ってらっしゃるんじゃないくて、静岡の食文化というものと一体なのが、こちらから生まれた誉富士であり、そしてこちらの水であり、そしてこちらの酵母であり、そしてこちらの舌の文化ですね。そういう形にならないものが、食文化を生んでいると。今もう観光客がどんどん増えていますから、ですから輸出しなくてもこちらに来て、楽しんでいただければ良いというふうに思う次第でございます。

今日はお二人ですね、大阪、あるいは岡山のそれぞれの縁があるところから来て、結局、最終的にここが一番良いと。それをもう初めからわかっている発言者3さんだとかがいまして。それでこちらで、子どもたちの安全とお年寄りのオレオレ詐欺からの防犯ですね。それから自転車については、条例ができていますから、保険にも入らなくちゃいけない。お酒を飲んで運転してはならないし、傘をさして運転してはいけないとか、いろいろ決まりがあります。そうしたこと、全部細かいことは発言者1さんに聞けばいいというわけで、法学部もこちらの教育学部も良い青年を育ててるなということ、こちらをあずかっている者としては嬉しく存じますし、そして大阪から来られた、あるいは本家本元の、こちらに戻って来られてお酒造りに杜氏として頑張っている発言者4さんもいて、大変頼もしく思った次第であります。本当にお二人のお話、ありがとうございました。

【傍聴者1】 静岡市の傍聴者1と申します。手短かに言いますとね、私、静岡の未来をあんまり楽観していないんですよ。知事も最初の立候補の時に教育改革ということをお

っしやったと思うんですが、覚えていますか。その教育改革は上手くいっていますか。私はね、この静岡から人が流出するという話もありましたけれど、この問題は大きい問題だと思うんですよ。学校がそれを考える使命を持っているわけじゃないんですが、やっぱり教育の方向そのものも、検討する余地は十分あるんじゃないかと思うんですよ。去年も静岡の市長に話をしたんです。「静岡は移民とか移住の受入宣言をしたらどうか」ということと、もう一つは、「静岡発のベンチャー企業を立ち上げるような、そういう応援なり仕組みづくりをしたらどうか」と言ったんですが、知事はそういう方面、どうお考えでしょうか。

【川勝知事】 大切な御質問いただきまして、どうもありがとうございました。今年のラグビーワールドカップ、「シズオカ・ショック」という名前にもなって、大成功に終わったのは御案内のとおりです。約17万6,000人の方がエコパに見に行きました。しかし、ここはサッカー王国です。2年ほど前にラグビーのことを知っている人はほとんどいなかったと思います。しかし、実はこの1、2年の間に、教則本を作り、そして磐田のジュビロの選手が学校に出向いて、体系的にやっているんです。今、日本の教育は、学力テストに表れるように、英国数理社をすごく大事にすると。しかしですね、人間の成長には、スポーツも演劇も、それから音楽も、それから農業も工業もいっぱいあると。ですから、この社会全体が先生になるような方法をどうしたらいいかということを探求しておりました。そうした中で、今教育委員会に、こちらの市長さんもそうですけれども、首長が出席することができます。社会全体の意見を教育委員会という執行機関に提言することができるんです。それで、5年前に、そのスポーツマンの清宮さんとか、ピアニストの仲道さんとか、あるいは演劇の宮城さんとか、いろんな人に入っていて、2時間じっくり意見を聞いて、その意見を教育委員会に持っていった。そのうちの意見の一つが、ラグビーのワールドカップがあるので、これを教則本にしてやったらどうかということ。それから農業経営者が入っています。「農業をもっと大事にしてください」と言われましたので、農林大学校という農業専門学校がありますが、これを来年から大学に変えます。それから工業、「ものづくりが中心だろう」と言われましたので、技術専門校というのが清水とか沼津にあるんですが、再来年からこれは短大になります。で、私はですね、もちろん今の大学なんかに行くことも大事なんですけれども、中学ぐらいで、岩崎恭子さんみたいに世界クラスになった人もいるし、伊藤美誠さんや、

あるいは平野美宇さんや水谷準さんは、みんな中学校の時に行く道を決めているんですよ。ですから、そういう方向に教育を変えていくということで、この社会全体、傍聴者1さんも含めて全員が、子どもたちの教育に何らかの自分たちのできる貢献をしようという、そういう方向に舵を切っているところであります。教育改革というのは一朝一夕にはできません。ただし、できれば元服、昔は数えて15歳です。その時くらいまでに、自分は何がやりたいと、例えば発言者3さんは、こういう人前で演劇をしたり、そういうことが大好きだと。そしたら、SPACを通してとか、あるいは大学で理論を勉強して、そういう世界にきっと進まれるんだと思いますけれども、10代の前半くらいの時に自分が生きる道を選んだ時に、それを受け入れるシステムを作ると。

ちなみに私は、農業高校や工業高校、商業高校、水産高校といった実学を学ぶ高校の青年たちに知事賞を出しています。その青年たちは、もう10代の半ばで、自分は漁師になるんだ、自分は会計士になるんだ、自分は農業士になるんだ、自分はお茶やりたい、自分は牛が大好きだからと選んでいます。田方農高に行ってごらんなさいませ。高校1、2年生は毎日お乳を搾らなくちゃいけないんです。それを検査して、農協に持って行って商品になるので、一日もサボれないんですよ。それを高校3年生が高校1年生に教えている。まったくごまかしがきかない。そういう青年を励ましたいということで、私はこれを「技芸を磨く実学」と言っているんですが、知性を高める座学と同じくらいに技芸を磨く実学が大切だと。そして、その技芸というのは、中小企業の方だとか、農業士とか、あるいは水産の方だとか林業士だとか、そういう人たちが持っているわけですね。その人たちみんなで子どもを教育しようじゃないかと。だから、地域の自立は教育の自立から始まると。ですから、そういうことで、静岡の子どもは静岡人370万人で育てられると思っています。

それから、今静岡には9万2,000人も外国の方がいます。いろんな国の方が来ている、そしていろんな食文化も持たれています。ある人は例えば、自分は卵のアレルギーがあるとか、あるいはベジタリアンだということと同じように、ムスリム系の人たちは豚肉は食べない、アルコールもお飲みにならない。何でもないことですよ。で、それを今ハラールというように言いますけれども、ハラール、ついこの間までは一軒も二軒もなかったのに、今74軒もの方たちが、静岡県には2万軒くらいのいわゆる食堂がラーメン屋も含めてあるんですけど、それがもう74軒にもなりました。ハラールの方たちが心配しないで食事ができる。そういうのはですね、立派な、食文化を教える先生方だ

と思っているわけですよ。そういう方向に舵を切っているわけですが、スポーツとか演劇とか芸術とか、春風亭昇太さんがやっているような芸能とか、こうしたものを、みんななどでもやれるならやっごらんと。ただし、それで一人前になれるかどうかはわかりません。だから 30 歳ぐらいになるまでは修行時代だと。失敗しても当たり前だと。失敗は許そうと。ただし 35 歳を過ぎたら、四捨五入すれば 40 歳だから、自分の責任ですよと。だから 30 歳前後までは試行錯誤してごらんなさいと。その時ぐらいまでに本当に自分がやりたいことをやるという、そういうふうな方向に舵を切っておりまして、少しこの静岡の教育の、県のですね、教育政策をごらんになりますと、一貫して、富づくりの一番の基礎は人づくり、子育てから保育園幼稚園、小学校中学校と、それから授業に入っても、一番大切なのは人材ですから、人材づくりというのは、広い意味での教育でありますけれども、そういうのを一番大切にしてやっておりますけど、まだ不十分だと傍聴者 1 さんの御批判があるのかもしれない。

いずれにしても、大事な御指摘をいただきましてありがとうございました。

皆様、今日はですね、1 時間 15 分という限られた、通常 2 時間やっているんですね、でも夜のこともありますので、ちょっと時間が少なくて、発言の方も、一回しか発言できないと、やり取りが十分にできなかったのを残念に思っております。傍聴者 1 さん以外の方も、何かきつと言いたいことがあったのかと思いますけれども、この夜の会合は 2 回目のことでもございますので、御不満な点があったかもしれませんが、お許しくださるようお願いいたします。ありがとうございました。